日本館館長に聞く
上海国際博覧会と日本館の出展

中国2010年上海国際博覧会
陳列区域日本政府副代表
日本館館長　江原（えはら）　規由（のりよし）

今、世界で最も熱い視線が注がれる中国。その中国の代表都市の上海で「中国2010年上海国際博覧会」が5月1日から10月31日までの6ヵ月間開催されている。参加各国が自ら展示館を建設運営する1970年大阪万博型の大イベントで、7,000万人の来場者を目標に掲げる過去最大規模の万博である。日本は、1970年の大阪万博を契機に、日本経済と日本人の生活が大きく変わったが、それ以上に上海万博は中国経済と社会を激的に変えるのではないかといわれる。

日本は「こころの和・わざの和」をテーマに、外国パビリオンの中で最大規模を誇る官民一体によるパビリオンを出展し、当会も協賛している。日本の伝統の知恵と最先端の環境技術を取り入れたといわれる日本館（愛称　紫蚕島）の江原館長に、会期期間3ヵ月を過ぎた8月、これまでの手応えや日本館出展の目的、万博が中国で開かれた意義と万博後の中国経済の行方、日中関係の今後などについてお話を伺った。

― 会期3ヵ月が過ぎた中での手応えについて

おかげさまで日本館は大変人気があり、連日多くの方々に見に来ていただいています。先日、中国側が行ったアンケート調査で大変うれしい、また興味深い結果が出ていました。参観前の人を対象にした調査では、行ってみたい人気上位3館は、中国館が1位で、2位米国館、次いで日本館の順で、参観後では、中国館、サウジアラビア館、日本館の順でした。上位3館の特徴を展示されている技術に絞ってみると、中国館は独自技術と海外からの導入技術の共演展示、サウジアラビア館は海外から導入・購入した技術の展示、日本館は100％メード・イン・ジャパンの技術展示と、3館3様でお国の事情が見て取れます。一般的に、中国人はエンターテインメント型あるいは参加型のパビリオンが好きなようです。

日本館は、特にマスコミから、日本の環境・省エネ関連技術の水準の高さ、そのストーリー性のある展示やショーに大変高い評価を得ています。中国の指導者に、日本の最先端技術を見ていただくことは大きな意味があり

ます。日本館がマスコミに取り上げられれば、多くの中国の人に日本の高い技術を知ってもらえることになります。また、日本館参観は、日本を知ってもらう絶好の機会ともなります。上海万博への出展の最大の意義は、等身大の日本を知ってもらうことで、そうなれば、今後の日中経済交流にプラスになると思います。

― 万博日本館出展の目的について

地球が抱える課題はたくさんありますが、特に環境問題への対応が非常に重要でしょう。日本館はこうした課題を特に重視しています。例えば、成長と環境の関係をどうとらえるのか。成長も必要、環境保護もそれと同じくらい重要です。日本館のテーマは「こころの和・わざの和」です。環境問題など地球的規模の課題の解決に向けて、科学・技術の進歩は大きな役割を果たしますが、それだけでは限界があります。われわれ一人一人の気持ちが重要です。技術と人がうまく調和することが重要ではないかと、日本館は問題提起しています。例えば、汚れた水を最新機器で飲み水にすることは、今の技術をもってすれば可能でしょうが、同時に、水を汚さないという気持ちを持つことも必要でしょう。それが日本館のテーマの意味するところです。今、中国の企業では環境意識が大変高まっていますが、最終的には国民、人民の意識が向上しなければなりません。環境意識の向上という視点で上海万博を見た場合、日本館の提案は大きく貢献することになるでしょう。

展示・2020年ゼロエミッションタウンのイメージ
日本の最先端環境技術の展示

展示・日本の四季と伝統
春　満開の桜の下の茶室

― 日本館の愛称、建築の特徴について

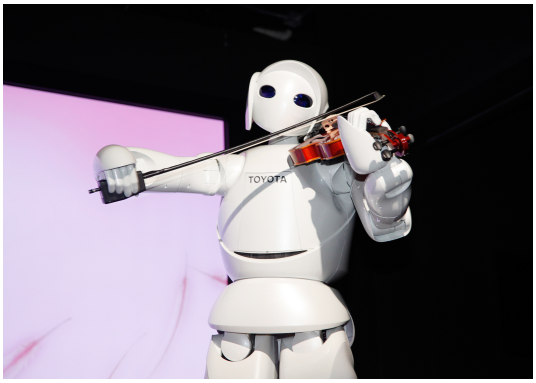
日本館は、通称「かいこじま（紫蚕島）」といわれます。外観が繭に似ているということから、公募により中国の方に命名していただきました。紫は、日本館のテーマ色で、「高貴」、「長寿」を意味するところは日中両国で共通しています。日本館は、「縁の下」や「打ち水」など日本伝統の知恵と最先端の環境・省エネ技術、新素材技術を組み合わせた建築物です。生命体のように呼吸する建物とも呼ばれています。透光性の良い新素材と超薄型の発電フィルムで覆われ、3つの角（煙突状）と3つのくぼみを設けて、太陽光や雨水風を取り込み、二酸化炭素の排出量を軽減する設計となっています。例えば、地下に雨水をた

め、その蒸発を利用して館内温度を下げたり、煙突効果を利用して空気を館内還流させるなど、日本の古くからの知恵を活かし自然の力をうまく取り入れた環境に優しい、未来の建築物です。もちろん、屋根に設置された太陽発電フィルムで発電しています。

― 万博が中国で開かれた意義と万博後の中国経済の行方

上海万博開催が決まったのが2002年12月。その決定から8年後に中国が日本を追い抜き世界第2の経済大国になるとは、当時誰も予測していなかったと思います。今後とも中国が高成長を遂げていくことは間違いないと思いますが、今、中国は和諧（わかい）社会の建設を目指しています。今後、中国が目指す和諧社会とはどのようなものなのか、中国は国内外に発信していくことになるでしょう。さらに、中国への理解を高めるために、文化も含めて中国の多様性を世界に発信していく、つまり、中国はソフトパワーの発揮を必要とする時を迎えたといえます。

中国は、経済の持続的成長を希求するとともに国際化を進め、世界との密接なかかわりをますます深くしていくでしょう。特に、「走出去戦略（中国企業の海外展開）」が急速に進む中、中国の対外投資は、今後加速的に増えていくとする識者は少なくありません。



プレショー・日本のハイテク技術
バイオリンを弾くパートナーロボット
（介護・医療・家事等支援ロボット）

メインショー・ミュージカル
未来の地球を思う心のつながり
（日中が協力して保護活動を行うトキをモチーフにした物語）

上海万博は、世界の目が中国、上海に長期間にわたり注がれ、中国への理解を深める大きなチャンスであると思います。

― 日中経済関係の深化に向けて商社への期待

今後は、日中両国は協力して、例えば、環境問題に取り組み、官民の交流を深め、また、企業間では新たなビジネスモデルが構築されてくるでしょう。その過程で、日中双方の投資関係も新たな展開を遂げていくと思いますが、特に中国企業の対日展開が確実に増えてくるでしょう。こうした新たな潮流を発展させ、日中経済交流を拡大できるのは、対中ビジネスで経験豊富な商社ではないでしょうか。この分野で大いに日中ビジネスのリーダーシップを発揮していただきたいと期待しています。

（2010年8月11日、上海万博日本館館長室にて、山中通崇）